

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

No.27 (May 2015)

日本ギaskell協会ニューズレター

ギaskellと William Fairbairn

松村 昌家
(大手前大学名誉教授)

1855 年の夏（日付不明）、ギaskellはウィリアム・フェアベアンあてに、かなり長い一通の手紙を送った。最初の一節を引用しよう。

親愛なるフェアビアン様 — ご親切な友情あふれるお手紙文と、『北と南』に関してまことに公平なご批評を賜りながら、お礼を申し上げるのがかくも長びいてしまい、恥じ入っております。実は今まで拙著が出る度に、何か一言いただけるものと、期待感がありましたので、今回も何のお言葉もいただけないのだと、半分はあきらめていたのを、ご承知ください。作家というのは（他の人たちも同じでしょうが）、一度甘やかされると、なんともずうずうしくなるものですね⁽¹⁾。

残念ながら肝心のフェアビアンの手紙文が残されていないので、彼の『北と南』評がどういう内容であったのかは知る由もないが、両者の間に厚い友情が通っていたことは確かである。そして、その評を一読して、ギaskellが喜び浮き立っていたことを察することもできる。かつて『メアリ・バートン』に関して W.R. グレグの痛烈な批評を浴びた苦い記憶も、ふっとんだことであろう。

ウィリアム・フェアベアンについては、エンジニアという肩書ですましている場合が多いようだが、“Sir” の爵位が物語るようにただのエンジニアではなかった。L.T. ロルトの『ジョージとロバート・スティーヴンソン: 鉄道の革命』や、『セルフ・ヘルプ』で有名なサミュエル・スマイルズの『エンジニア列伝』に述べられているように、フェアベアンは、R. スティーヴンソンと共にウェールズ北西部のメナイ海峡に鉄道橋（tubular bridge）架設に関わったことで、その名を残している人物である。

そんな大物エンジニアと作家ギaskellでは、バランスがとれないと思う向きもあるかもしれないが、彼とギaskell夫妻とはユニタリアンとして親交があったばかりでなく、マンチェスターにおける文化活動において、常に先頭に立って重要な役割を果たしていたのであった。

その具体的な一例として、「英国科学振興協会」（British Association for Advancement of Science）における彼らの活動ぶりを見てみよう。

この『英国科学振興協会』は 1831 年に設立され、イギリス国内の各都市が持ちまわりで、年に一回ずつその大会を開催するというシステムになっていた。最初の開催地はヨーク。そしてオックスフォード、ケンブリッジでの大会をへて、商業都市や工業都市があとにつづいた。

マンチェスターと関連してまず注目したいのは、ウィリアム・ギaskellがすでに 1840 年にその英国科学振興会の会員になり、活動をはじめていたということである。そしてマンチェスターでは 1842 年と 1862 年の 2 回にわたって、その大会が開催されることになるが、第 2 回大会のときにはウィリアム・ギaskellが準備委員の一人としての役目を果たし、ウィリアム・フェアベアンが議長をつとめた。オックスフォード、ケンブリッジをはじめ、欧米諸国からも大ぜいの学者たちが、マンチェスターを訪れて大成功を収めたということである⁽²⁾。

最近興味の趣くままに、ヴィクトリア朝のマンチェスターにおける中産階級が果たした絵画や建築を含めた諸ジャンルの文化的役割に関する研究を読み漁っていると、英国科学振興会大会なども、単に一箇のイベントとして片づけるわけにはいかなかった。一つの大きな流れ、あるいは連鎖として展望する必要性を痛感するようになった。

その連鎖の中で一際光彩を放つのは、いうまでもなく、1857 年のマンチェスター美術名宝博覧会だと思うのだが、

この大イベントの立役者が、ほかならぬウィリアム・フェアベアンの子、トマス・フェアベアンであったのだ。

他のところでも書いたことがあるが、マンチェスター美術名宝博の最初の唱道者は、ジョン・C・ディーンであった。しかし、ディーンは、トマス・フェアベアンの力量を俟たなければ、彼の構想は実現しないということを予知していた。

この時代にマンチェスターで世界最初の美術博覧会を成功させた（しかもすべて自前の経費で！）という功績の大きな部分として、私はトマス・フェアベアンがラファエル前派の絵画に目ざめ、自らハウルマン・ハントのパトロンになって、あの名画『目ざめた良心』を生み出したことを強調したい。これを機にマンチェスターは、ラファエル前派の作品収集の拠点になるべく、その第一歩を踏み出していたのである。

ギaskellとW. フェアベアンとの間がらについては、もう一つ付け加えねばならないことがある。1857年7月、『シャーロット・ブロンテ伝』にまつわる騒ぎのまただ中でフェアベアンに宛てて書かれた手紙のことである⁽³⁾。マンチェスターにおけるマーガレット・ヘイルのビルドゥングを思い起こさせるような書きぶりであるのが興味深いのである。

1. J.A.V. Chapple and Arthur Pollard, ed., *The Letters of Gaskell*, Manchester University Press, 1968, p. 352.

2. Jenney Uglo, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*, Faber and Faber, 1993, pp. 134-35.

3. J.A.V. Chapple and Arthur Pollard, *op. cit.*, p.458.

◆◆◆ 新刊紹介 (2014年度) ◆◆◆ (掲載情報は2015年3月15日までに報告されたものである。)

石塚裕子 (翻訳)、『大いなる遺産』(上)(下)、ディケンズ著 (岩波書店)

大前義幸 (共著)、『イギリス文学の悦び——原公章先生古稀記念論文集』(大阪教育図書)

新刊書の情報を事務局 (secretariat@gaskell.jp) までお寄せ下さい。締切は2016年2月末日です。

第26回例会レポート

日 時：2014年6月7日(土) 午後2時から

会 場：アルカディア市ヶ谷 (私学会館)

開会の辞：日本ギaskell協会会長

鈴木 美津子 (東北大学名誉教授)

研究発表：司会 大野 龍浩 (熊本大学教授)

1. 「ギaskellの作品にみる医者

——ヴィクトリア朝における医学の進歩」

遠藤 花子 (日本赤十字看護大学非常勤講師)

(撮影：大野龍浩)

2. 「ギaskellが描くブランウェルの死」

芦澤 久江 (静岡英和学院大学短期大学部教授)

講演：司会 木村 晶子 (早稲田大学教授)

「家庭小説の政治学——リチャードソンからギaskellまで」

大河内 昌 (東北大学大学院教授)

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大島 一彦 (早稲田大学教授)



研究発表

1. 「ギaskellの作品に見る医者 —— ヴィクトリア朝における医学の進歩」

今回の発表では、Gaskellの6つの長編小説、*Mary Barton*, *Cranford*, *Ruth*, *North and South*, *Sylvia's Lovers*, *Wives and Daughters* に登場する医者に焦点を当て、作品を年代順に追いながら、Gaskellが医学の進歩をどのように見ていたのかについて考察した。

その結果、6つの長編小説を通し、悪者扱いされていた「役に立たない医者」が徐々に最善を尽くしてくれる、生活に密着した「身近な医者」へと変容していることが判明した。処女作 *Mary Barton* では医学への絶望が終始語られているが、19世紀イギリスが経験した目覚ましい医学の進歩と共に、小説1作品を経るごとに医学に対する見方は変化し、遺作 *Wives and Daughters* では医者は信用できる存在となり、更には、今後の新しい科学技術に対する期待も込められているものとなっている。Gaskellは作家として、忠実に医学の発展史を描きつつ、同時にすべての人々が平等に受診可能となる医療改革の重要性を訴えた功労者の1人であると言えるのではないかと結論付けた。

(遠藤花子)

2. 「ギaskellが描くブランウェルの死」

ギaskellは『シャーロット・ブロンテの生涯』において、ブランウェルがロビンソン夫人に失恋し絶望したため死んでいったと暗示している。しかしロビンソン夫人に失恋したあとも彼は詩を書き続けている。それどころか友人レイランドに「小説を一巻書き上げた」と述べ、彼の創作意欲は衰えることはなかった。ところが1847年の6月5日を最後にブランウェルは突然詩を書くことを止めている。このころ、ブロンテ姉妹はブランウェルに内緒で詩集を出版し、雑誌で好評を得ていた。出版に関してブランウェルが気づいていなかったとシャーロットは思っていたようだが、狭い司祭館でブランウェルがまったく知らなかったとは考えにくい。ブランウェルは姉妹が出版したことを知り、絶望の淵に追いやられたのではないであろうか。そうでなければブランウェルが筆を絶った理由を説明できない。ロビンソン夫人に失恋したことより、姉妹に敗北したこと、それがブランウェルの最大の絶望であったとわたしは思う。ブランウェルは姉妹の裏切りに遭い「神などないのだ」と心のなかで叫び、死んでいったにちがいないのである。(芦澤久江)

講演：「家庭小説の政治学——リチャードソンからギaskellまで」

18世紀に誕生した英国小説の主要ジャンルである「家庭小説」が、ギaskellに至るまで、どのように政治的意味をもち続けたかを、大河内氏はこれまでの家庭小説の研究や私的領域と公的領域をめぐる政治学的理論も踏まえた上で、明晰に解説された。

リチャードソン以来、恋愛と結婚を主題とする家庭小説は、近代市民社会の誕生と不可分で、市場経済の利益にとられない女性の恋愛のイデオロギー的意味の分析を使命とする。一見、非政治的な家庭空間は、実はイデオロギー的に重要な意味と機能を持ち、国家・市場の問題を家庭・家族の問いに翻訳して象徴的解決を示す「家庭小説」が、ヴィクトリア朝でも形を変えつつ受け継がれている。こうした視点から、氏はギaskellの作品にも新たな視点を提供なさった。幸福な家庭の崩壊・再生の過程を描く「家庭小説」として『メアリ・バートン』を解釈し、「家庭的なもの」のイデオロギーが、労資問題の重要な鍵となることを指摘された。また『クランフォード』も、恋愛が支配する女性的空間を社会全体に拡大した作品として読めるという、刺激的で洞察力に満ちた考察を示された。

(文責：木村晶子)

「例会に参加して」

第26回例会は、2014年6月7日(土)、新会長鈴木美津子氏の「開会の辞」により開会した。悪天候にもかかわらず参加された約30名の方々の熱意に氏は謝意を示され、新体制での例会への期待が高まった。

はじめに大野龍浩氏の司会で、氏と同じく英国バーミンガム大学で研究をされた、遠藤花子氏、芦澤久江氏の研究発表が行われた。ギaskellは『メアリ・バートン』で医者に対して批判的な面を表しているが、遠藤氏がギaskellの長編作品の推移と共に、医者の社会的な地位や特質が向上したことに加え、葉の重要性や看護する女性の立場の変遷が見られたことを考察されたのは大変興味深かった。

芦澤氏は、ブランウェル・ブロンテが詩作においても活躍していたこと、作家F. レイランドが彼を擁護したことなどを丁寧に検証することで、ブランウェルの新しい実像を明らかにされて大変啓蒙的だった。ギaskellが描いたブロンテの伝記研究の新たな解釈の可能性がさらに広がったことを実感した。

次に、木村晶子氏の司会により大河内昌氏の講演が行われた。氏はN. Armstrong, M. McKeonらの家庭小説論等を皮切りに、家庭小説における女性的美德と市場経済論理との連関を論じ、続けて『パミラ』から『メアリ・バートン』まで実際にその理論を例証された。

講演に先立ち木村氏が紹介されたように、家庭小説の政治的含意を見る際必要な「徳」の概念論争と、その概念の女性化された表象についての大河内氏のご考察は、18—19世紀思想史およびヒュームを含む英国哲学史の大家であられる先生ならではの貴重なものだった。今回、論理の展開の方法などをご教授頂くと同時に英文学研究の最先端の粋に触れる機会をいただき、実に充実したひと時であった。

滞りなく進んだ例会も、新副会長の大島一彦氏の「閉会の辞」をもって無事終了した。

閉会后、会館内「レストラン フォッセ」にて懇親会が行われ、大河内氏や遠藤氏、芦澤氏を囲んで約20名が、会員相互の親睦を深めておられた。初夏の夕暮れの美しい緑樹を見晴らしての話題はギaskellの文学にはじまり、英国の階級性や女性の地位の変遷、近況や各自の研究報告など多方面に及んだ。美味しい料理を楽しみつつ、諸先生方の貴重なご意見を伺えることは私のみならず若手研究者の方々にも幸福な時であったと思う。

例会開催の労をとられた関係者全ての方々に心から御礼申し上げます。

(聖心女子大学大学院非常勤講師 太田裕子)

第 26 回大会レポート

日 時：平成 26 年 10 月 4 日（土）午後 1 時より

会 場：明治大学（リバティタワー 1084 号室）

開会の辞：日本ギaskell協会会長 鈴木 美津子
（東北大学名誉教授）

シンポジウム：

「ヴィクトリア朝における社会領域とジェンダー」

司会・講師 宮丸 裕二（中央大学教授）

講師 大石 和欣（東京大学大学院准教授）

講師 倉田 賢一（中央大学准教授）

（撮影：大野龍浩）

総 会：総合司会 事務局長 市川千恵子（茨城大学准教授）

講 演：司会 市川 千恵子（茨城大学准教授）

「ナショナル・アイデンティティの変遷 —— オースティンとフォースターのあいだで」

丹治 愛（法政大学教授）

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大島 一彦（早稲田大学教授）



シンポジウム 「ヴィクトリア朝における社会領域とジェンダー」

女性作家として注目されつつも、ジェンダー研究の圏外に置かれてきたギaskellについて、本シンポジウムは、一つの糸口として社会領域という視点を据えることで、ジェンダーの本質を詳らかにしようとする試みとして企画した。

「社会小説家と社会的な小説家ーディケンズとギaskell」

主に社会小説のベストセラーを書いた作家として注目を浴び始めたエリザベス・ギaskellは、歴史に記録されるような公共圏の中心に隣接したかたちで存在していたと言える。しかし、ギaskell本人のあり方、扱われ方、そしてギaskellの小説のある部分は公共圏に存在することを回避しようとする意志が多々見られる。そのことは特に『メアリ・バートン』あるいは『克蘭フォード』といった初期の作品をめぐって編集をめぐるディケンズとのやりとりの見られる互いの社会的立場に関する認識の中に辿ることができる。そこには男性作家ディケンズに対する女性作家ギaskellという単純な二項対立ではおさまらない面が見えてくる。ギaskellが社会から与えられた立場、ギaskellが描こうとした小説、手紙の中から、ギaskellがいた場所といようと望んだ場所を、ディケンズのそれと並んで明らかにした。

（宮丸裕二）

「ギaskell v ギaskellーユニタリアン男性たちの言説とユニタリアン女性たちの公共圏」

ウィリアム・ギaskellの宗教言説は、18 世紀末以来のユニタリアンの美徳である「博愛主義」や「率直さ」、「真理」、「良心」を讃える。だが、一方で「個人同士の愛情」に基づいた良心の自由を強調している点で、「理性」の働きを重んじた前世代とは明らかに異なる。貧民たちと「個人的に」対面し、社会の実態を知るべきだという同朋ユニタリアンのジョン・ハミルトン・トムスの言説や、「良心」の根源に「意志」に従った「愛情」を据えるジェイムズ・マーティノーの言説と呼応している。エリザベス・ギaskellの小説に見られる「リアリズム」は、「良心」に従い社会の「真実」を捉えるのを義務とするそうしたユニタリアンの美徳に根差している。『北と南』はその傾向が特に強い。重要なのはその美徳が女性によって体现されていることだ。マーガレットは嘘をついたことに良心の呵責を感じ、自らの意思に従い愛情を伴ってヒギンズ父娘と接し、資本家ソーントンに労働者との個人的関係構築の美徳を説き、誠意を持って真理にかなった社会的「義務」を果たそうとする。このジェンダー置換は女性たちが親密圏と公共圏を独自の形で行き来する可能性を示唆している。

（大石和欣）

『ルース』を読むジョージ・エリオット」

本発表では、ギaskellとジョージ・エリオットが「アイデンティティの偽装」と「墮ちた女」において相互に関係していることを示したうえで、『ルース』を分析した。この作品において「アイデンティティの偽装」は、正しい目的のための誤った手段、あるいは結果を計算した行為であり、存在から意識を遊離させるものとして、ベンソン氏が自虐的に悩むところとなっている。他方で、ルース自身はそうした葛藤をいわば他人任せにしており、ベリಂಗムの愛人となっているときも、ベンソン家に引き取られているときも、一貫して自分（のイメージ）というものを持たない。彼女においては悔悟も成長もなく、はじめから存在が意識によって透明に代表されているのである。ルースが救われるべき「墮ちた女」として過剰に理想化されていることはもちろんであるが、ここで語られている理想の論理は、自己イメージの削減という意味での主体性の欠如が、じつは究極の主体性を生むというパラドクスに関わる点において、意義深いものである。

(倉田賢一)

講演：「ナショナル・アイデンティティの変遷——オースティンとフォースターのあいだで」

オースティンは、ピクチャレスク美学の影響のもとでイングランドの田園風景の美を発見した作家であったが、その風景は農業労働者の痛苦と「生産にかかわる事実」を「追放」（レイモンド・ウィリアムズ『田舎と都会』）した牧歌的な風景だった。田舎と都会を二項対立的にとらえる牧歌的構図はディケンズ、ギaskell、ジョージ・エリオット、ハーディといった社会小説の伝統をつうじて批判され、それにしがたって農村の痛苦をリアリスティックに描写する作品が生み出される。その一方で、一八八〇年代以降の新帝国主義の展開とともに、ブリティッシュネスを地とする田園主義的イングリッシュネスの観念があらわれてくるが、その観念の影響下に書かれたフォースター『ハワード・エンド』を最後にとりあげることで、オースティンとフォースターのイングリッシュネス観念の異同を論じた。

(丹治愛)

「大会に参加して」

ネクラとかオタクとはちがうけれど、案外ひとりでいるのが好き。気の合わない人と無理して行動するよりは、外国へさえひとりで旅立つタイプ。けれど41名もの大勢が集った日本ギaskell協会第26回大会に参加して、人間ひとりでは生きていけない、との思いを強くした。大石先生がユニタリアンの考えとして紹介された、人と人とのつながりの大切さ、そしてそれが個人のレベルを超えて、宮丸先生が解説された公共圏にまで広がっていく可能性。倉田先生が分析された『ルース』のように制度や機構をすり抜けて透明に生きた人でも、時代を超えて現在の私たちに重要な意味を投げかける。そして文化というよりは文学研究がしたいとおっしゃった丹治先生の言葉は胸にしみた。

このように心と心が熱くかよいあう場を共有できたのだから、私も大会の偉大な歴史になんらかの痕跡を残したいと質問もさせていただいた。そして、たわいない自身の歴史に深く刻まれたのは、28人の想いがあふれた懇親会での、質問してくれてありがとう、という一言だった。やはり人間ひとりではなく、互いの思いやりに支えられて生きている。

(和歌山大学准教授 桐山恵子)

研究会レポート

◆◆◆研究会に参加して◆◆◆

ギaskell協会の研究会(読書会)では、短編を中心に、作品を出版年代順に追いながら、その理解を深めています。持ち回りで簡単なレジュメを作成し(あらすじ、登場人物紹介、研究書からの引用等)、個々の意見を出し合いながら、新しい読み方の提示や作品の再考を行っています。短編を古いものから年代順に読むことは、特に前後に書かれた作品との共通点の発見につながり、長編の研究や考察にも役立っています。大学院生の有志で読書会を開き、作品鑑賞と批評練習の機会を設けている大学もあるかと思いますが、その場合は他の時代や作家の作品も扱うため、自分の好きな作家だけに集中して読むことは難しいのではないのでしょうか。その点、当研究会では、ギaskellの作品だけに集中して鑑賞することができ、御専門の先生方のご意見を直接伺う機会にも恵まれるため、毎日が貴重な勉強となります。興味をお持ちの方はアットホームな雰囲気の当研究会に、ぜひ一度お越し下さい。

(北里大学非常勤講師 矢嶋瑠莉)

※研究会の様子が、実践女子大学同窓会である実践桜会広報誌『那与竹』の平成27年度4月号に紹介されました。

日本ギaskell協会役員会報告

1 役員会報告

1) 平成 26 年度第一回役員会 (6 月 7 日 (土) 11 時～12 時半、於 アルカディア市ヶ谷 5 階 赤城の間)

①入会者初年度会費について

過去の役員会の取り決めで入会初年度は会費免除となっていたが、学会の財政状況や他学会の例も鑑み、新入会員も初年度から会費を徴収することとする。ただし、大会開催後の入会希望者の場合は、主な学会活動がすでに終わっていることから、会費徴収は翌年度からとする。その場合、当該年度のニューズレター、『論集』は配布する。

②ギaskellの没後 150 周年について

平成 27 年 (2015 年) 度はギaskellの没後 150 年にあたり、協会の記念行事としては『エリザベス・ギaskell中・短編小説研究』の出版が予定されているが、さらに大会を記念大会とすることが提案され、了承された。また、大会のための特別予算措置は講じないことを確認した。

③没後 150 周年記念論文集について

大野編集委員長より記念論集の編集作業について、以下の通り報告があった。論集の投稿者は 27 名 (翻訳者 3 名を含む)。査読の方法については生誕 200 周年記念論文集の際のものを踏襲する。7 月中旬に査読結果を投稿者に連絡、修正依頼をする。7 月末から 8 月上旬に最終稿を揃え、夏休みにレイアウト作業をする予定。

④研究会について

隔月で行われている研究会の責任者を、引き続き多比羅真理子氏に担当していただくことを確認した。

2) 平成 26 年度第二回役員会 (10 月 4 日 (土) 11 時～12 時 20 分、於 明治大学リバティタワー 1081 号室)

①英国協会年会費値上げについて (平成 27 年度以降)

英国協会の会計担当者から連絡があり、年会費が 5 ポンドずつ値上げされ、日本からの会員は 30 ポンドになる。現在は 4,000 円を徴収しているが、値上げに伴い平成 27 年度から徴収額を 5,500 円とする。なお、現在の会員で該当するのは 28 名。

②年会費の段階制について

他学会でも年会費の段階制を採用している例があることから、本協会でも現行の学生 (1,000 円) と一般 (5,000 円) に加え、さらに非専任と退職者に異なる年会費の枠を設定するか否かについて様々な意見が出された。その結果、まずは総会で会員に意見を募ることとした。

③『論集』創刊号から 12 号まで掲載論文の HP 上の PDF の公開に向けての会員への連絡と承認について

『論集』13 号以降は HP 上で公開されているが、それ以前の号は電子ファイルがないため公開されていない。来年度ニューズレター送付の際に併せて該当する執筆者に公開の諾否について確認を取り、その後 PDF 化の作業に入る。

④没後 150 周年記念論集について

編集委員の大野委員長より、記念論集の研究成果公開促進費「学術図書」申請に当たり、申請者名について担当者に確認を取ったところ、当初の予定どおり、「日本ギaskell協会編」で申請することとなった。

⑤協会の創立 30 周年 (平成 30 年) について

協会の創立 30 周年に向けて、記念論集の刊行が提案された。編集委員会については来年度の第一回役員会で検討する。

2 総会報告

①英国協会年会費値上げについて

英国協会の年会費の値上げに伴い、平成 27 年度から徴収額を 5,500 円とする。

②年会費の段階制について

役員会で議論された会費の段階制について、現行の学生 (1,000 円) と一般 (5,000 円) に加えて、非専任と退職者に異なる年会費の枠を設定するか否かについての意見を事務局へ寄せていただく。

③『論集』創刊号から 12 号まで掲載論文の HP 上の PDF の公開に向けて

現在 HP 上で公開されていない創刊号から 12 号までの掲載論文の執筆者に公開の諾否を 5 月初旬に書状で確認をする。

④協会の創立 30 周年 (平成 30 年) について

平成 30 年に協会創立 30 周年を迎えることから、役員会にて記念論集の刊行が提案されたことを報告した。

(文責 市川千恵子)

◆◆◆◆日本ギaskell協会 第27回例会の御案内◆◆◆◆

日 時：平成27年6月6日（土）午後2時から 会場：静岡産学交流センター（ペガサート）
研究発表 司会：波多野 葉子（元筑波学院大学教授）

1. 「トランスアトランティックにおけるギaskellの受容と変容」
——劇作家 プーシコーのロング・ストライキ (1866) 松浦 愛子（釧路公立大学准教授）
2. 「二人は何を見つめていたか——ギaskellとブロンテの「眼差し」を考える」
杉村 藍（名古屋女子大学教授）

講 演 司会：松岡 光治（名古屋大学教授）
「ギaskellの「ジョンソン」——言語、語り、出版文化」 原田 範行（東京女子大学教授）

◆◆日本ギaskell協会 第27回大会 予告◆◆

日 時：平成27年10月3日（土）午後1時から 会場：名古屋大学
合評会（仮称）

「ギaskell没後150周年記念論集『エリザベス・ギaskell中・短編小説研究』をめぐって」
大野 龍浩 編集委員長、執筆者

講 演 司会：芦沢 久江（静岡英和学院大学教授）
「press-gang をめぐって——Mrs Gaskell と Mr Hardy」 深澤 俊（中央大学名誉教授）

◆◆◆ 研究会予定 ◆◆◆

ギaskellの短編小説の読後感を自由に語り合い、鑑賞する研究会です。

“Libbie Marsh's Three Eras” (1847) から読み始めた会も3年目を迎えます。本年度は1855年から書かれた作品を取りあげます。

作 品：平成27年 5月 “Half a Lifetime Ago” (1855)
7月 “The Poor Clare” (1857)
9月 “The Doom of Griffiths” (1858)
11月 “My Lady Ludlow” (1858)
平成28年 1月 “Right at Last” (1858)
3月 “Manchester Marriage” (1858)

日 時：奇数月 第二日曜日 午後2時～午後4時

会 場：実践女子学園桜会館（東京都渋谷区東1-1-40 Tel: 03-3407-7459）

JR 渋谷駅東口より徒歩7分。渋谷警察署脇の六本木通り、首都高速に沿って坂を上る。一つ目の信号を渡り、住友不動産ビル裏に向かう細い道を右折、右手の建物。

日時、会場に変更がある場合は日本ギaskell協会 HP に掲載しますので、新着情報をご覧ください

（多比羅眞理子）

●●●●● 編集後記 ●●●●●

前号に引き続き、編集を担当させていただきました。
この場をお借りいたしまして、お忙しいところ原稿をお寄せ下さいました先生方、企画・編集にご助言をいただきました会長の鈴木美津子先生と事務局長の市川千恵子先生に、御礼申し上げます。

今号では、新しい試みといたしまして、例会・大会に参加された会員の方に、参加レポートをご執筆いただきました。また、研究会の参加者の方からのレポートも掲載しております。ぜひご覧ください。

（編集 小田夕香理）

発 行：日本ギaskell協会

〒310-8512

茨城県水戸市文京2-1-1

茨城大学人文学部

市川千恵子研究室

URL: <http://www.gaskell.jp/>

e-mail: secretariat@gaskell.jp

発行日：2015年5月1日